

理論編
実践編

宇宙意識という視座

Dr. for the Earth

地球のお医者さん

平井孝志

オーガニック農法・農業編・畜産編

オーガニックで健康ライフ

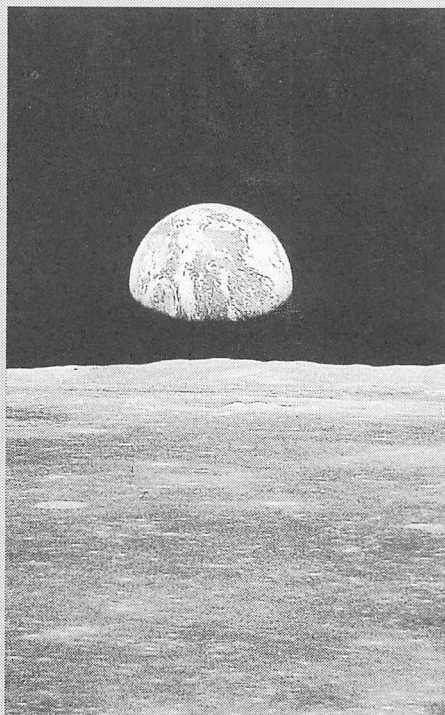
生命の系

循環と共生の根理

科学と経済の陥穽

物質の系

第一部 理論編



第1章 宇宙意識という視座

地球を離れて

漆黒の空間に浮かぶ青く小さな球体は、白い綿をちりばめ、幼子の笑顔のように光り輝いている。

雲は湧き立ち、流れ、消えていく。小さな雫が束となり、大きな潮流となって力強く進む音が聞こえる。数え切れないイノチが息づいている。地球の脈打つ音が聞こえる。それらの音はハーモニーとなり、地球の調べを奏でている。その姿は凜として頼もしいが、今にも壊れそうなガラス細工と同じくらい繊細だ。

地球は生きているという人がいる。地球は一種の生命体であり、それ自体が私たちと同じく「イノチ」を宿しているのだと。私も同感だ。

私たちはこの星でしか生きてゆけない。さらに、この星の極めて限られた場所でしか生きてゆけない。そんな世界の片隅で、私たちは生まれ、また新たな生命を育む。たとえ周りに無限の空間が広がっていても、そこは暗黒の虚無でしかない。そう考えれば、ますますこの星

が愛しく、大切に感じられる。

四五億歳とも五〇億歳ともいわれる地球にいだかれ、たくさんの方のイノチが瞬きするほどの短い生涯を精いっぱい背伸びしながら生きていく。

ひたすら天をめざして伸びようとするもの、木漏れ日の中で小さな白い花卉を幾つも幾つも見つかるもの。連れ合いと子どもを率いて今日の糧を探すもの。木の葉を踏みしめる足の下にも、目に見えない小さな生き物たちがいる。

そして自然の法則に身をゆだねることを忌み嫌いながら、新しいモノや技術を追い求めて猛進するもの——われわれ人類もいる。

限られた環境でしか生活体験をもたない私たちは、環境の大切さや重大さを十分に理解してゐるとは言いがたい。自然環境はもちろん、国、法律、文化、生活習慣、経済など全てを含む意味での「環境」の大切さや重要性を認識するためには、その環境からいったん抜け出して違う環境に身をおき、あらためてそれまでの慣れ親しんだ環境をながめてみる必要がある。

宇宙飛行士は、地球という環境から抜け出し、宇宙から地球を見た数少ない経験の持ち主だ。しかし「生態系から離れたところから生態系をながめる視点」は、実際に宇宙飛行をすることでしか得られないというのではなく、自らの意識を月面や宇宙空間をもってゆくことで獲得で

きる。

環境やイノチに対するとき、あるいは思わぬ質問を受けたときや判断に迷ったとき、私はその質問や命題から少し距離を取り、あるときは屋上へ、またあるときは空へ、さらに月や宇宙へと意識を飛ばしてみる。そうすることによって、近すぎて見えなかった要素を発見したり、自然の摂理に沿った方法を導き出すことが多い。

宇宙へ意識を飛ばし、そこから地球を想う視点のことを、私は「宇宙意識」と呼んでいる。環境、植物、動物などイノチあるものは元来一つのものであり、動的な存在だ。しかし私たちはそれらに対峙するとき、一つのを細分化し、動的なものを静的に観察しようとする。そうすればするほど本質から外れてしまうのに。

宇宙意識とは、そのような近視眼的な所作に陥りやすい私たちに不可欠の視点である。

月と暮らす

潮の満ち引きは、月と太陽の引力と地球との位置関係によって引き起こされることはよく知られている。一四億立方キロメートルもの海水を動かす大きな力が、地球上で活動する人間を含めた動物や植物に対して全く影響を及ぼさないと考えることはできない。

月は二七日七時間四三分をかけて地球の周りを一周する。現在の一週間が七日であることは、一カ月が二八日であったころの名残であり、神が七日間でこの世を創造したことから来るのではなく、人類が文字を有する以前から身体に染みこんだ月と地球のリズムが根底にあるのだから。立春、春分などは太陰曆（旧曆）に基づいており、太陰曆を用いて播種や定植から収穫までを行う月農法と呼ばれるものもある。

時計がなく、テレビや電話なども置かず外界との接触をすべて断ち切った暗室内にいと、人は太陽のリズムである二四時間周期から、月のリズムである二四・八時間周期で生活するようになるという。

物質によって遮断できない月の影響は、引力か磁場である。恐らく強いのは引力の方であろう。地表の三分の二を占める海水に潮汐を起こす強大な力は、人体の三分の二を占める体液にも潮汐現象を引き起こす。いずれにしても、私たちは天体や惑星の運行の影響を大きく受けているという事実に変わりはない。

カキは満潮に殻を開き、珊瑚は大潮に産卵する。生涯のほとんどを陸上で暮らす西表島のアカテガニは、八月のある時期になると海岸に向かって移動し始め、大潮のときに産卵する。クサヅグ、カブトガニ、カリフォルニアのトウゴロウイワシも大潮に産卵する。人間の月経サイ

クルは月齡の一カ月にあたる二九日半であり、妊娠期間は月齡の九カ月、二六五・八日である。私の母も「出産は大潮のときに」と言っていた。

地球に潮汐を起こす一五億馬力という途方もない力が、地球上に生きる動植物にも影響していると考えるのは当然だろう。

先の出産の言い伝えと同じように、満月の夜に犯罪が増えることは誰とはなく昔からいわれていた。

アメリカの精神科医アーノルド・リーバー氏は、月が人間（生き物）に与える影響のことをバイオタイド (biological tide) 理論として発表した。

リーバー氏がフロリダ州デイド郡で起きた一八八七件に及ぶ殺人事件の発生時間を調査したところ、新月と満月のときに発生が顕著であることがわかった。文字通り、犯人たちは頭に血が昇ってしまったといえよう。

同様に、満月時は外科手術の出血が多いとか、精神病患者の症状が悪化しやすい、放火が多くなるといった傾向も、経験や統計などで裏付けられている。

このような傾向を否定する論文も少なくない。しかし、前述したようにさまざまな生物が同様の傾向をもつのも事実である。リーバー氏は「月のリズムは生物学的時間の一要素」である

と言っている。複雑な要素が絡み合う生物にとって、一要素で全てに共通の傾向を見ることの方が難しいと考えられる。

月だけでなく、太陽や他の惑星、ひいては星座の影響も考慮しなければならないかもしれない。占星術ではないが、地球が大宇宙の中で他の全てから影響を受けると同時に他へも影響を及ぼしていることに気づくのはとても大事なことだ。そのことがわからなければ、人類が宇宙を垣間見たという経験は生きてこないし、今後の諸科学の発展もおぼつかないだろう。

私たちは、自分と自分以外の人間や環境との相互関係の中で生きている。つまり、自分自身が他から影響を受けると同時に、他にも影響を及ぼしている。

宇宙意識から見れば、自分と自分以外のものは、離れていて実は一つなのである。

「環境問題」の環境

宇宙意識で地球をながめれば、そこに見えたものは「自然環境」であった。立体的な地球を平面での写真を通じてしか想像できないこともどかしく、それでも時間を忘れて見続けたい気持ちであった。

いつまでも余韻に浸っていたいが、そうもいかない。地球の引力に引き寄せられるように、

宇宙意識の高度は大気圏内に突入する。太陽の光を反射した青い輝きは消え、現実のありさまが否応なく立ち現れてくる。

それはあたかも、白銀の世界から雪解けを経て、だんだんと露あつらになっていく街の風景を早回しで見るとうだ。宇宙からは「無い」と確認できた国境や境界線、どれをとってもローカルな問題でしかない政治やイデオロギー、ばかっていると感じた戦争や犯罪、そして経済活動や環境破壊といった現実が、容赦なく目に飛びこんでくる。

宇宙意識からとらえた自然環境というビッグスケールから見れば、その中に内包される他の環境——社会、生活、文化、経済など、私たちの生活そのものであるさまざま環境——の存在は、オーケストラの奏でるハーモニーの中で咳払いをするかの如く、相容れない異質なものに感じられる。

昨今の環境ブームのおかげで、「環境」という言葉が冠された単語が日に日に多くなっている。そして、それらのほとんどには「問題」という単語が付随し、人間にとって好ましくない事態をともなっている。

「環境」には多くの分野がある。単に「自然環境」というだけでも、地球規模で進行する温暖化やフロンによるオゾン層破壊などの問題から、森林環境、河川環境、農業・畜産・水産の

環境など多岐にわたる。「経済環境」も同じで、マスコミを連日にぎわす金融関連やそれらを巡る政策関連の状況のほか、中小企業の経営環境まで、さまざまな環境をあげることができる。これら以外にも多くの「環境」があり、またそれぞれを小さな環境に細分化することもできる。ここに「環境」というものの特徴と扱いにくさがある。

環境という概念は「主体とそれ以外」または「主題とそれを取り巻く世界」というように、「定義する側の立場」や「焦点をあてている物事や物質」によっても変化してくる。百人いれば百の異なる環境があり、百人全員が各々の立場で地球環境について考えてもらうこともできる。

そのうえ、環境は個々が独立して存在または機能しているのではなく、互いに関連し影響しあいながら常に変化しているので、ある事項だけを取り出して考えることは非常に難しい。

そのことを、私の住む滋賀県草津市の天井川を例に説明してみよう。

草津市は、古来より琵琶湖の渡し船の港として、また江戸時代には東海道と中仙道を結ぶ陸・海両面の交通の要衝として栄えた。市内を流れる草津川は、大雨のたびに濁流を生み、運ばれた砂が川底を押し上げていった。住民たちは新たな氾濫を防ぐために、川底に堆積した砂をすくっては、堤防に積んでいった。こうして自然との闘いを繰り返すうちにできあがったのが、

川底が天井ほど高い天井川だ。

現在は、護岸工事に加え別ルートに人工の新草津川が建設されたことで、氾濫は回避されているが、流域の住民にとってたびたび氾濫する天井川との闘いは、田畑家屋敷を守るための自然環境との闘いであった。また草津市街を分断するように流れる天井川は、自動車の往來を不自由にして川の兩岸で開発に地域格差を生じており、特に経済環境にとって問題であるとする見方もある。

また一方では、堤防の桜並木は春の風物詩として毎年多くの市民に憩いの場を提供しており、広域的な空間を持ちにくい日本型都市形成の中にあっては貴重な空間だと見る向きもある。阪神大震災を目の当たりにした私たちにとっては、広域避難場所としての価値もあり、災害に悩まされてきた過去を考えると逆の意味で自然環境との闘いのためという範疇はんちゆうにいれてもよい。世界的にも珍しい大規模かつ市街地にある天井川という観点からは、文化環境として見ることもできる。

ローカルな話題ではあるが、「環境」という概念は人間が便宜的に作り出した相対論であり、「環境」問題というのは視点や主体をどこに置くかによって変わってくるということがわかりただけだろう。

ご注意

- 1 掲載文書は執筆時の生データを基にしていますので、推敲を経て実際に出版された文章とは若干違う場合があります。悪しからずご了承下さい。
- 2 リンクはどのページでも確認不要です。
- 3 商品宣伝・商用目的の引用についてはお断りする場合があります。
- 4 本サイトに掲載されている記事・コラム・解説文・写真・その他すべての無許可転載を禁止します。あらゆる内容は日本の著作権法及び国際条約によって保護を受けています。